週刊えっとう 5

1988.2.17.発行

キリスト教協友会
越冬小委員会641-7183

	参加	地区内	地区外	総数
2/8 月	32	96	225	321
11 木		78	216	297
12 金	38	120	202	322
13 土		92	167	259

1500人のフィリピン人

法務省の統計によれば、1986年1年間で、日本滞在中に「資格外活動」をしたフィリピン人男性は1500人です。これは、4年前の1982年に比べると100倍以上です。

資格外活動とは、たとえば、観光目的で日本に来て、実際は仕事をした場合を言います。

フィリピン人1500人のほとんどは、土木作業、日雇労働者として建設現場で働いています。しかし、建設現場で働いたフィリピン人はこの数倍ともいや十数倍とも言われています。ひらたく言えば、フィリピンから沢山の出稼ぎ労働者が日本に来ているのです。釜ヶ崎では、あまり目だちませんが、横浜や名古屋では、賃金上でのトラブルもあり、労働組合に相談が持ち込まれています。

新聞の伝えるところによれば、この6月までに、出稼ぎ、とくにアジアからの出稼ぎの問題について、政府（労働省、建設省、法務省、外務省の四省）の意見をまとめるそうです。多分、いまは法律（入管法）で「出稼ぎ」は禁じていますが、それを認めることになりそうです。

そうなると沢山のアジアからの労働者が、釜ヶ崎をはじめ日本の各寄せばや建設現場で働くことになります。

これは、日本人の新しい経験です。そのとき、アジアの人たちをべっ視するのか、仲よくするのか、ためされる時です。それはまたわたしたちが、在日朝鮮人問題について真剣に考えるときでもあります。

寄せ場も大きく変わろうとしています。

人間と認められず♪♫
♪♪ 死んでさえ名前も知られず

……土曜夜まわりで聞いた南米の出かせぎ労働者のうた……

釜ヶ崎へ行った感想

金森　弘司

「なんか信じられへんことやってんなぁ。」と僕は一番最初に思いました。

僕は、行く前に、カメラを持って行って、人々をとるとか、わけのわからない事を考えていましたが、坪山君に、「釜ヶ崎の人を特別な人と思ってほしくないなぁ。」と言われて辞めました。しかし、あんな所で寝てんねんから、やっぱ「特別な人」とちゃうかな、という疑問が残りました。

ところが、実際行ってみると、坪山君の言うとおりでした。道路で寝てる人たちは、そのへんのおっさんとちっとも変りません。それどころか、もっと根性があって、やさしい人ばかりでした。僕は自分が、なんて失礼な事を考えていたんだろうと、反省させられました。また、一人のおっちゃんの話を聞くと、仕事を探しに60Km歩いたとか、脳いっけつで倒れたとか、本当に信じられない事ばかり言っていました。そのおっちゃんは、僕らがそこを離れようとしても、まだ話しかけてきたので、やっぱ、寂しいんやろな、と僕は思いました。

木曜夜まわり学習会

今日の学習会のテーマは'釜ヶ崎をとりまく福祉と病院'についてです。

厳しい労働内容や、高令者や病弱者に仕事がない事、賃金未払いや労災もみ消しなど'労働の面'での大きな問題とともに病院ー福祉の問題も日雇い労働者にかかわる大きな問題である。釜ヶ崎の日雇い労働者が福祉(市更相)から入院する病院は決められている。あびこのH病院や京橋のK病院などがその典型です。'釜病院'あるいは'釜病棟'と呼ばれていて、汚い部屋、医療従事者の態度の悪いこと、薬づけ、検査づけなどのひどい処遇をうけがちです。病院側も福祉から必ず患者さんが来るわけだからなかなか処遇を改善しようとしないのが実状です。その中の典型が南海沿線にある広崎病院です。鉄格子越しの面会を改善しようともせず居直っています。このようなひどい病院には抗議なり交渉をしつこく行っていかなければならないでしょう。

労働現場や飯場が市内にとどまらず大阪府内外に拡散しているように、病院もまた拡散しています。このことは釜ヶ崎の問題が釜ヶ崎の内だけにとどまらず、みなさんの身近な所にも存在する事を示しています。

感想文

おっちゃんに話しかける時、顔を見ながらしゃべっていないのか、

何回も同じ場所を回っているのにあまりおっちゃんの顔をおぼえていない。おっちゃんは、だいたい同じ場所で寝てはるというのに……自分自身は顔（目）を見てしゃべってるつもりやから、もしかしたら記おく力が悪いのでは？などといらん事を考えながら、今晩もおっちゃんにしゃべりかけています。乱筆乱文、大変失れいいたしました。

17年前からこの近く（4.5分はなれた所）に住んでいるのにこのパトロールは今日で、はじめてです。それはどうしてでしょうかと自分に問いかけている。野宿している人たちは私の兄弟だということはまだまだピンと来ないが、出来るだけ今日道で出合った人たちのかおに知り合いの人のかおを想像しています。そうすると今、心が動きはじめるようです。これからのかかわりとは――それは後で分る。　（男　48才）

知人に、「お前は、何で釜のパトロール行ってんネ。」と言われます。あまり良くわかってないのが本心です。その知人は、西成区出身の男で、「お前らが何でするのかヨーわからん。」と言います。

確かに、その通りだと思います。私はつい先日、高価な車を買いました。小使いをたんまりもらい、遊んで遅く帰っても、電気も布とふ厚いフトンがまってる家で生活しています。

今頃よく思います。自分が偽ぜん者なのではないかと。〈人の為と書いて偽いつわりと読む。〉パトロールのパンフレットの中で「社会勉強のためなら、来るな!!。」……僕は本当は、ここへは来れない人間なのでは、と思いつつ、毎週来ています。自分と克とうしながらも。

また来週も来ると思います。

（21才　男　学生）

土よう夜まわりその⑤

今回の学習会のテーマは"どうしてアジアの人達が日本の寄せ場で働くのか．現在①"ということでフィリピンのミンダナオ島でのバナナ農園．バタァン半島でのダム建設に関してのスライドを通して学習しました。

ミンダナオ島の人達は米を作ったりしながら自然の中でのんびりと暮らしていました。そこへアメリカの資本家が"田んぼや牛ではもうからんやろ．バナナを作ったら金になるぞ。わしらが会社を作るからそこで働かんか!"と持ちかけ．土地を買いあげバナナの大農園を作りました。雇われた労働者は早朝からトラックの荷台にぎゅうぎゅう詰めに乗せられてバナナ農園に連れていかれ．そして働きました。

バナナは一年中収穫できるので日本でくだものの少ない時期は大量の需要期でもあり．日本に輸出する為に女性達はバナナについている農薬を洗い落とす作業を素手で徹夜をしながらしなければなりませんでした。せめて手袋くらいつけさせてくれと頼んでも賃金よりも手袋の方が値が高かったといいます。だから生活は以前より苦しくなりました。農場で働けなくなった人達は都会に出てスラムに住まざるを得なくなり．それでも生活に困ってる人達は"日本にいけばなんとかなる"という事で家族の為に日本の寄せ場に働きに出かけているという事で．バナナ(アジア)と寄せ場のつながりを学びました。私達がバナナを食べられるという背景にはそんなしんどい生活があるんだということを知りました。

(現地の人が作った資料によると一本100円のバナナを日本に売ったとして87円は資本家に．現地の人にはたったの13円しか入ってこないそうです。)

もうひとつのバタァン半島では．アメリカや日本の工場が増えて電気がいるというのでダム建設の話が持ちあがりました。村人は大自然の中で段々畑を作り独特の文化と暮らしを持ち村人をはじめ世界中から反対の声があがったにもかかわらず．アメリカはダム建設を強行しました。その結果．村人達は都会に追われ自然とかけ離れたスラムに住まざるを得なくなり．ゴミの山の中から使える物を拾って生活したり．それでも生活ができない家族は父親が外国に出稼ぎに出かけました。ダムの中に沈んだ村．その背後にはそんな生活があり．寄せ場とつながっていることを知りました。

週刊えっとう 6

1988.2.24発行
キリスト教協友会
越冬小委員会641-7183

	参加者	地区内	地区外	総数
2/15 月	30	59	126	275
18 木	42	88	194	282
19 金	41	108	212	320
20 土	78	90	173	263

座標軸

「福山から来たんだったら、えーと鉄の…」

「日本鋼管ですか」

「そう。不況で日本鋼管からも失業者が出たでしょう。クラスの中にいる？お父さんが日本鋼管につとめている人…」

「いたかなー」

「わたし因島から来てるんですが」

「そしたら造船でしょう」

「失業者が出ています」

信号が変って、道をわたることになり、この話はそのままと切れてしまいました。後で考えてみて、少々残念なことをしてしまったと思います。

この会話は、広島県福山から来た中学生たちとかわしたものです。中学生たちは、特別授業の中でテーマをもって勉強しています。「釜ヶ崎」「核と平和」「男女差別」

釜ヶ崎をテーマに学んでいた子が、調べるだけでは不充分と仲間や先生に呼びかけました。生徒14人、先生4人。合計18人で土曜日の午後、釜ヶ崎にやって来ました。ふるさとの家で釜ヶ崎について説明をうけたあと、夜まわりに参加しました。

夜まわりが終ってから2人の生徒に感想を述べてもらいました。一人は、いろいろ事前に調べていたろども。もう一人は、とにかく釜ヶ崎へ来た、なんでもはじめてのろども。

二人ともほぼ同じことを話していました。想像していた釜ヶ崎とは全く別のもの。野宿している労働者に声をかけると「ありがとう」と返事がかえって来て、そのやさしさにおどろいたりなど……。

正直いって、わざわざ福山から18人も来たと聞いてびっくりしました。でもその意図や過程を聞くに及んで感心しました。私立中学校だから出来たと言え、子ども、教師、親たちの合意があって、はじめて出来た行事です。

生徒たちのはきはきした態度にも好感を持ちました。これから、この体験をどう生かす

かも課題です。

ただ、迎えた方としては、さきの会話の続きをしておかなかったのが残念です。

福山－鉄－日本鋼管－失業まで話した。あるいは、因島－造船－失業。どんな人が失業して、失業者がその後どうしたか。実は、その失業者のうちの何人かは釜ヶ崎に来ているのです。

ここまで話が来たら、もっと福山と釜ヶ崎は別なつながりへと発展したかも知れません。

釜ヶ崎と福山を軸にして見ていくと、野宿する労働者のいる街とは別の、日雇労働者の街釜ヶ崎が浮きぼりになります。

何を座標軸にして物をみるかは大切です。とくに自分たちの足もとに、その座標軸をすえるとき、関係がさらに身近かなものになります。いま、勝手ですがそんな発展を中学生たちに期待しています。

木曜夜廻り 学習会を通して

今回の学習会は、「原子力発電所と寄せ場」というテーマでした。原子力発電所内のずさんな事、その中で釜のおっちゃん達は、どの様に働らいているかよくわかりました。

原子力発電所は、放射能を平気で外へ出しているんですよ！　例えば、所内で着ている服を洗って（所内で）その汚水を海にたれ流しているし、所内の空気が悪くなったら平気で窓を開けて空気を外へ出しているんです。

もう御存知の通り発電所内で働いているのは、下請けの下請けの人達。それは、釜のおっちゃんであり、東南アジアから来る出稼ぎ労働者です。電力会社側は、自分達の手を汚さず、いつでも切り捨てられる、従順な労働力を使うのです。

所内で働く時は、放射能汚染をさける為、宇宙服の様な動きにくい服を着ます。あまり

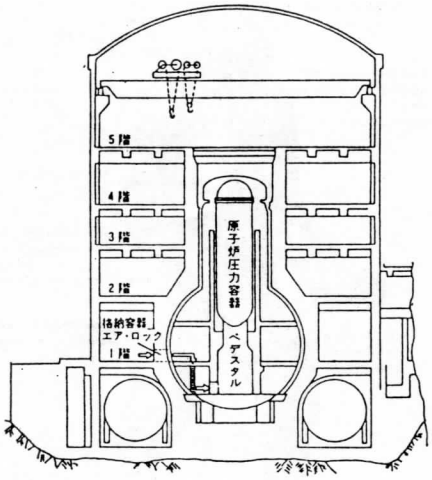
全面マスク・防護服姿

の熱さに息がしにくくなり、マスクをとる人放射能を受ける量を測るメーターをはずして基準汚染量以上働らく人。汚染される様なことをしている労働者が配慮不足と言われれば

それまでですが、危険な所内では、それだけ働きにくい現実があるという事です。

原子力発電所は、必要もないのに、資本家と国家がもうける為に、造られているのです。現に、水力、火力発電でも、電気は余るくらいなのです。

原子炉建屋断面図



今回の学習会で、原子力発電所は、危険で必要のない物、造ってはいけない物という事を新めて強く認識しました。この学習会に参加できなかった人達も原発の事を勉強して、認識を深めて欲しいと思います。

土よう夜回り その6.

今回の学習会のテーマは前回に引き続き、"どうしてアジアの人達が日本の寄せ場で働くのか、現在2."という事で実際にフィリピンに行ったことのあるあいちゃん、そんがん、ともいの3人の話を通して特にマニラ周辺の貧しい生活を強いられている子供達の事を知りました。

生活は貧富の差が激しくスラムの人達は掘っ立て小屋に住み貧乏人は金持ちには出会わないし金持ちも貧乏人の所には行かないし、金持ちと貧乏人が結婚することもないという。食べ物はマニラ市内では肉類が多いがちょっとはずれた所ではホルモンやご飯など日本（釜周辺）と同じようなものを食べているという。

子供達は7才位になると一人前の働く者として扱われ両親が仕事に出かけるので下の子の面倒をみたり昼間から"遊び"よりも生活の為に仕事をしているという。遊んでる子は金持ちの子であるという。（遊ばずに学校にも行けずに生活の為に仕事をしなければいけないところにしんどさがあるし心が痛んだ。）どんな仕事かといえば水くみをして台車で運んだり、新聞、ガム、キャンディー、たばこなどを観光客やフィリピン人に売ったり"スモーキーマウンテン"（マニラ中のゴミを捨てる場所）で使える物を探したりすることだという。とにかく一円でも金にしないと暮らしていけないから頑張っていたという。

それと夜中に繁華街で小学校高学年位の子が沢山集まっていたという。なんでやろと思ったら"コールボーイ"（体を売って金をかせいでいる）をしてるという。女の子も"売春"という形で金をかせぐ。そんな事が当り前になっているという。かせいだお金も自分の為に使うのでなく、家族の生活の為に外国人に何でも売ってしまえというので体まで売っている。そのかせいだお金でご飯が食べられる家族がいると思うと何ともいえないショックだったと話してくれました。（それ目当てに行く日本人もいるという事はほんまにショックな事です。）

なんで僕達はこんな豊かな生活ができるのかをこの子供達の生活を通して考えて欲しいと訴えられました。いろんな事を一つ一つ知っていって自分を変えていくことが大切なんだと思いました。

――発言者から――

学習会では、事前に何も打ち合わせてなくて、時間も短かかったこともあって、フィリピンの子らのしんどい事ばかり強調したみたいになってしまいました。

自分たちがふれたフィリピンのこどもたちやおとなたちは、生活は苦しくても、そんなんを感じさせないくらい明るく、解放的でねばりづよい人たちでした。また機会があれば、そんなことも話したいと思います。

編集部より

「週刊えっとう」は協友会の発行です。
各グループの人たちの活動内容や意見をみんなに知らせてください。

週刊えっとう

7 1988.3.13.発行
キリスト教協友会
越冬小委員会641-7183

	地域内	地域外	総数
22 月	124	257	381
25 木	110	171	281
26 金	132	230	362
27 土	92	201	293
29 月	96	272	368
3/3 木	76	148	224
5 土	86	152	238

北まわりBコースの報告(月)

今夜は比較的あたたかく、まわっていても気がらくである。このコースは大体決ったところに決った人がいて、しかも大低バタヤさんをしておられるので、まがりなりにも収入があり、帰ったあとまで心が痛んでどうしようもないということが割合に少い。しかし外で寝なくてもすむ手だてはないものかと毎回同じ思いを抱きながら帰ってくるのである。

上下厚いおふとんにしっかりくるまってやすんでいる人、たった一枚のうすい毛布を、かしわもちのように体に上手に巻きつけて、高いびきで寝ている人など、さまざまだけど12時をすぎていれば寝入りばなを起すのもはばかられて今日は持って行ったおにぎりもおみそ汁も一人の方に渡しただけで帰って来た。やはり、もう少し早い時間に出発し皆さんが起きておられる間にまわって想談ごとなど、じっくりお話が出来るといいなと思った。さいわい月曜のグループは来月上旬から10時出発と決ったのでよかったなと思っている。

「一枚の毛布、一枚の味噌汁を渡す時に、このささやかなものに元気づけられて、明日も一所懸命やりますといわれた時に感じるよろこび、こんなことに支えられて私もまた明日から頑張ろうと思うのである。」

土よう夜回り　その⑦

今回で土よう夜回りとしては一応、最後の日となりました。昨年の学習会では釜ケ崎の労働者と私達とのつながりを知り又、子供と一緒に夜回りするというある意味での〝楽しさ〟を知り子供達の感受性の鋭さに教えられました。今年は釜ケ崎の歴史や日本（炭鉱）と釜ケ崎、世界（アジア）と釜ケ崎のつながりを学習しました。学習した事を夜回りを通して考える中で自分達が変えられていきました。

さて今日のまとめの会では、まず純ちゃん（中3）がフィリピンの人達が一番よく歌う「バヤンコ」を独唱しました。ジーンときました。次に土よう夜まわりの歌「なんで夜まわりするの」の中で精神障害者差別と闘っているグループから指摘のあった3番の歌詞の中の〝狂ってる〟という箇所について2/17にそのグループの人達と話し合った事のまとめと今後どうするかについての報告と説明がありました。私達は日常の中で何気なしに口にすることがありますが精神症の人にとってはとても重たい言葉だったのです。その事を正しく理解して欲しいと参加者に訴えました。一人でも傷つく人がいる限り使うべき言葉ではないと思いました。そのうえで歌詞は〝まちがってる〟に変えました。そして全員で歌いました。（尚、詳細は里夜回りだより⑦で公表されますので読んで下さい。）

次に毎週発行されている〝里夜まわりだより〟の中から自分の気に入った作文を書いた人に読んでもらいました。（夜まわりだよりは最初から最後までしっかり読んで下さいね）

一応夜まわりは終りました。しかし今日で終るのではなくある意味で本当の夜まわりは一人一人の心の中で今日から始まるのだと思います。私達が幸せに暮らせているその背景を見つめ続け、野宿している労働者と世界がつながっている事を認識し続ける中で真の幸せな社会、夜回りなんかしなくてもいい社会、世界中の人が幸せだと言える社会になる日までどんどん仲間を増やして共に頑張りましょう。最後に全員で〝流れ者〟を歌いました。とてもいい歌です。さあ、これから始まりです。

私の思い…… 参加者の声

「夜まわり」の事は知ってはいたけれど参加したのは今回が初めてです。最初に見つけたおっちゃんに言われて救急車を呼んだのですが、はっきりとしゃべれないおっちゃんに対する態度がひどい救急隊員で本当に腹が立ちました。釜ヶ崎は本当に「強いものにへつらい、弱い者にはとことんひどいしうちで痛めつける」日本の姿を表わしていました。おっちゃん達を踏みつけて成り立っているような社会の一員である自分が非常にはがゆく思えたのですが、かと言って今何をすべきかもわからずに夜まわりを終えてしまいました。

めんまりなにもできなかったけれど気持ちで頑張りました。学習会、釜のことから色々な問題が発展して良かったです。もちろん全て釜の問題として深く感じました。弱者切り捨ての社会構造、それをなぜかしら、しらん間に受けいれてしまっている世間ちゅうもんなんか悲しい。 男32才

木曜の夜まわりに参加するのは今日で3回目。はじめて来たときはやっぱり何となく恐かった。実際に青カンしているおじさん達と話をしてみると、僕らと変わらないんだということがよく分かった。僕の気持ちの中にも、日雇労働者の人たちへの差別意識や偏見があるということに気付かされた。 学生22才

おっちゃんたちの顔が善良そのものなのに冷たい風と、時たま通る電車の轟音の中で横たわっている姿を見て心が痛む。はじめてさせていただくこのパトロールに、どうしてにこにことこたえながら受け入れてくれたのか、こちらにありがたいという出会いをいただいたようであるが、心は申しわけない気持で泣いている。元気でがんばってほしい。そんな願いでいっぱいです。

色々な社会問題が絡み合って釜ヶ崎の状態が生まれ、今もますます複雑化している事が今日の勉強会で、はっきりと意識化されてきました。そして、更に二回のパトロールで思うことは、弱い立場にある人々に近づくと、かえって私自身の心が洗われてゆくことです。ありがとうございました。

私の思い…… 参加者の声

小雨の中、今にも雨にぬれそうなオッチャン達。そして、ストーブと毛布のある家に帰る私。こんな「おかしな事」があっていいのだろうかと思いつつ、あと少しで、いや今もう、そんなものを飲み込んで生きています。「悩む事しか私には、できないのだろうか？」と今思っています。やはりまず、行動でしょうか？　20才M

前回初めて来た時に、自分の出来る事は何か……という大きくもあり、小さくもある課題をしょって帰りました。あれから1ヶ月ちょっとたって又来ました。1回目より2回目の方が考えさせられました。少しおちついて色々な問題がみえてきつつあります。私はただつっ走ってしまったような気がしてます。今回の参加で、自分が何をするべきか、考えが固まりました。動く以上はそれが充分に生かされなければ無意味です。私は私の地域で動こうと思います。釜ケ崎だけではなく、西成の人達に学ぶものが多く、これからの教会生活に役立てたいと思います。こういう機会を与えられた事、動く勇気を与えられた事、深く深く感謝しています。でも、あんまり考えてばっかりでも駄目ですね。ともかく動けばみえてくる、という姿勢はくずさないようにしたいと思っております。

越冬から梅雨期へ

今年の越冬活動を通し、わたしたちは一歩前へ踏み出すことになりました。

今年は、梅雨期のことを、越冬活動の延長線で考えようということになりました。総括集会に労働福祉センターのありむら潜さんをおよびし、労働の話を聞くのもその一つです。

わたしたちの小さなグループに特別のことが出来るとは思いません。でも、意識して梅雨期を迎えることは大切です。行政も不充分ながら越冬期は対策をたてます。それにひきかえ、梅雨期は冬以上のアブレがあり、路上生活者がいるのにもかかわらず、対策はゼロに等しいです。世間の目も無理解とは言え、梅雨期のアブレは「怠け者」ぐらいにしか考えていません。

むしろ、この辺で、釜ケ崎にかかわるわたしたちが、梅雨期の釜ケ崎は冬の釜ケ崎より厳しい、とアピールする必要がありそうです。まさに、日雇労働者にとっては「殺人の季節」です。「人を人として」のスローガンは、梅雨期にもまた必要です。

編集後記……一九八八年七月

＊

越冬総括集会のとき、越冬以後の問題としてアブレ期の対策、海外出稼ぎ労働者の問題が提出されました。六月十五日には三角公園で無縁仏の慰霊祭が行われました。慰霊されたのは百十七名。前年度よりも三十名多くなっています（朝日、六月十日夕刊）経済大国の労働者が遂に路上で倒れ、遺体となって発見される事実をしっかりと心に留めなければならないでしょう。更に海外から職を求めてやってくる出稼ぎ労働者。不法就労といわれてもあとをたたないのは、彼らの国の貧しさが、日本の富に関係しているからです。前々から関西新空港工事では、洋上飯場がつくられ、そこに外国人労働者がとじこめられるのではないかとの噂が流れていましたが、企業は遂にはっきりと洋上飯場の構想を打ち出してきました。洋上飯場＝第二の釜ケ崎論もあります。いずれにしても人間が人間らしくとの訴えはいよいよ切実なものとなってきます。（S）

＊

先日、日雇い仕事でA君と一緒になった。A君とわかったのは、飯を食ってからである。子ども会でよく遊んだものだが19才になったと聞いてビックリ、そう自分も40になってしまった。……　最近、暴力団、テキ屋の使い走りしている若者を見かける。気にはなっているが何も出来ないでいる。釜ケ崎で生まれ育った若者が偏見、差別に負けず、土方仕事しか出来ないのでなく、汗して働く土方仕事に誇りを持ってほしい、その為にも、新しい出合の場、交流の場としての〝若衆宿〟が必要である。仕事のこと、お金のこと、友達のこと、結婚、将来のことなど語り合い、励まし合うことによってホッとする一時、新しい仲間関係が育つ場の必要を切に感じます。（N）

＊

今（6月13日〜18日）は、集中医療週間まっ只中、あれもせなこれもせなと思いながら一日が過ぎていってます。でも医療相談に来る労働者にいつも感心させられることは〝みんなタフだねェ〟と思わされる事です。体も心もタフですよ。

では最後に一句

アブレ期を
もろともせずに
もう一パイ

＊

夜まわり、夜まわりと何故か夜まわりは話題になりやすく、また美談（？）にもなりやすい。本当は私達がするのではなく、道に、はたまた公園で天王寺駅で寝ているおっさんやおばさんが夜中の10時にむくりと起き上がり、「あんまり飲みすぎたらあかんで」とか「あんたも福岡か」とかいう調子で、同じように寝ている仲間に声をかけていくのが正統な夜まわりのような気もする。越冬の期間中は、夜まわりだ医療相談だ、もちつきだ、その上「あいつが西成署に引っ張られた」などとやたら忙しい。その忙しさをいつのまにかスケジュール化してしまいがちだ。主人公は誰だよ。K屋でビールを二本飲んでようやく思いだした。（F）

＊

越冬報告書ができるころ、季節はもう夏。釜の労働者も、炎天下で働く季節になりました。春はアブレで夏労働、無理して働き秋は療養、そんなこんなで越冬地獄。釜ケ崎の大先輩たちは、こんな中で何十年もがんばってきました。その大先輩も今は高齢者。働くことも許されず、一年中アオカンをさせられながら、時にはエアガンの弾を撃ち込まれ、火をつけられ、その上警察のイヤガラセを受けて留置されます。あーこうやって文章にしてるだけで腹が立ってきた。釜のおっさんたちに人間として生きる権利はないんか！。責任者出て来い!!（Z）

＊

6月19日、釜ケ崎にも横浜寿のカラバオの会、名古屋笹島のアルスの会とならんで、アジアからの出稼ぎ労働者を支援する会アジアン・フレンドが結成されました。外国、とくにアジアから日本に出稼ぎに来る人々に、日本人がどう対応するかは、これからの最大の課題です。一番おそれるのは、アジア人蔑視にもとづく差別です。この差別の克服こそ急務です。（Q）

協友ュ通信12 冬ケ崎1987年越冬

●発行日　1988年7月1日

●発行所　大阪市西成区萩ノ茶屋2－8－9
旅路の里気付

●編　集　「協友会通信12」編集委員会

●印刷所　㈲ 木村桂文社

●価　格　300円